論文の内容の要旨

論文題目　　ジョルジュ・バタイユにおける行動の論理と文学

氏名　　石川　学

本論文は、ジョルジュ・バタイユの思想における、「行動」の論理化の様態と、「文学」の意義づけの様態を、相互の連関を射程に入れつつ明らかにすることを目的としたものである。

本論文は三章構成である。第一章では、第二次世界大戦勃発までのバタイユにおける、行動の論理化の諸相を考察した。浮かび上がったのは、既存の支配的価値や権力を転覆し、世界と実存とを変革するための行動の発現を、学知を用いて歴史的必然として示しだそうとする、「武器」となる論理構築の展開である。

第 I 節では、『ドキュマン』誌（1929-31 年）で主張される反観念主義と、「低い唯物論」の検討を行った。自然科学の見地を導入した文化現象の解釈、また、ヘーゲル弁証法における「否定」のモチーフを導入した現象解釈を通じて、高次の観念と低次の物質という価値ヒエラルキーの歴史的な逆転に、自然法則の一般的妥当性を付与しようと努める論理的試みを詳らかにした。

第 II 節では、『社会批評』誌掲載の論考「ヘーゲル弁証法の基礎の批判」（1932 年）の分析を行った。ニコライ・ハルトマンのヘーゲル弁証法解釈と、精神分析学における「父と息子」の主題の解釈とを結びつける理路を通して、労働者階級による、ブルジョワジーから被る否定の否定、という革命行動の実現を、自然の弁証法が規定する必然として論証しようとする、論考の目論見の特性を解析した。

第 III 節では、『社会批評』誌に掲載された後続の論考「ファシズムの心理構造」（1933-1934 年）の検討を行った。そこで展開されている「異質学」が、精神分析学や社会学といった科学の知見を動員しながらの、ファシズムの権力基盤の正確な理解に向けた営みであるのと同時に、ファシズム体制の「転覆」に向かう情動の力を、民衆の心理にいかにして惹き起こすことが可能か、という、行動の遂行のための方法探求の試みであることを明らかにした。

第 IV 節では、政治組織『コントル＝アタック』（1935-36 年）における、バタイユの反資本主義・反ファシズムの行動の主張を考察した。民衆の情動への訴えかけという、ファシズムが用いた勢力拡大の手段を進んで応用しようとする意図を検証し、その主張が同時に、ファシズムの欺瞞を暴露し、民衆の情動をファシズムに抗する仕方で真に解放する方途を探る、知的探求と結ばれてあることを示し出した。

第 V 節では、雑誌『アセファル』（1936-1939 年）で呈示されるファシズム論の、新たな特性を抽出した。ヘラクレイトス＝ニーチェ的な、あらゆる存在の定立を許さない、流れ去る時間の観念と、それがもたらす「悲劇」としての実存の観念をもとに、ファシスト体制下の民衆を、至高のリーダーの殺害という「悲劇」へと誘う、行動のための理路の開拓が図られていることを論じた。

第 VI 節および第 VII 節では、「社会学研究会」における聖社会学の実践を読み解いた。コジェーヴの影響下でヘーゲル哲学を再解釈したバタイユが、「歴史の終焉」を、通常意識化されない「聖性」の全社会的な意識化の契機と捉え、かつ、そうした「承認」を成し遂げるための知的手段として、精神分析学および社会学への深い依拠を行うことを分析した。

続いて、社会学のあるべき結実が、神話を通じて結集する古代の宗教共同体を、現代に実現する科学的方法の確立であることを検討した。「社会学研究会」は、研究から発してそうした共同体を築き上げるための、集団的行動の母体であり、そうして成立すべき「悲劇の帝国」に、ファシズムという「軍隊の帝国」を凌駕する現実権力の掌握による、世界と実存の全面的変革の希望が託されることを解明した。

第二章では、第二次世界大戦以後のバタイユの、行動をめぐる思索の変遷を、その論理化に用いられた学知に対する評価の変遷を跡づけることから考究した。際立つのは、「武器」となる行動の論理から、「防具」となる行動の論理への、バタイユの志向の変異である。

第 I 節では、『ニーチェについて』（1945 年）のなかの、バタイユの神経症経験に関する記述に着目し、主体を引き裂く記憶の反復を敢えて望むことが、過去からの自由と、瞬間における生の充実の鍵となる、という論旨を抽出した。続いて、論考「広島の住民たちの物語について」（1947 年）を分析し、原爆投下後の広島のイメージに集約される、戦争のもたらす破局への演劇的自己投影に、瞬間の生を感得する機会が見て取られると同時に、戦争の破局によらずして

そうした瞬間の生を開示するための、「瞬間の倫理」の確立に向けた行動の問いが生じることを、戦後バタイユの思索に展望した。

第 II 節では、精神分析学に対するバタイユの評価変更を検証した。精神分析学に期待される、「意識と無意識との綜合」による実存変革の可能性、すなわち、「内的経験」を導く可能性が、意識と無意識に対する研究の不十分さを理由に棄却されることを検討し、戦前における行動の論理が多く依拠したこの学への、根本的疑義の発生を俎上に載せた。

第 III 節では、社会学に対するバタイユの評価変更を検証した。実存の全体性の回復に向けた行動を度外視する社会学者たちを批判するバタイユが、聖性の探求をなす学としての不成立を社会学に宣告し、かわりに、内在的に生きられる聖性を探求し、それとの一体化を図る学として、「無神学」を提起する過程を論じた。こうした変化の背景に、集団的行動を通じた実存回復への希望の断念と、現実に場を持たない、不在の共同体への最後の希望の存在を見定めた。

第 IV 節では、人間の実存を論述する手段として、現象学および実存主義に対して示される留保と、「全般経済学」の科学的優位への観点を検討した。内的経験を言語化するというバタイユ自身の目論見にあたっての、哲学的言述から、生産と消費という外的事象に係る経済学的言述への方法の移行を読み解くとともに、ヘーゲル哲学が「全般的な認識」の実現手段として、唯一無二の依拠を確保されることを論じ、次節への準備とした。

第 V 節では、『呪われた部分』（1949 年）における、全般経済学による歴史理解と政策提言の理路を、ヘーゲル哲学との本質的連関のもとに究明した。過剰エネルギーを消費する必要性をめぐる、経済の「全般法則」を歴史的に検討するこの著作は、未曾有に蓄積した過剰が米ソの破局的戦争を通じた解消に行き着くのを回避するべく、アメリカによる富の全世界的な贈与の遂行を主張する。この行動は同時に、労働＝行動の歴史的発生によって失われた、主体の「内奥性」を取り戻すための、歴史上最後の行動とされる。行動を廃棄するための行動に、行動の帰結に他ならない戦争の回避と、実存の歴史的な回復とが不可分に繋がれることを、戦後バタイユの思索の核として抽出した。

第三章では、主体の「内奥性」に直接到達する可能性を持つ言語形態とバタイユが見なす、詩＝文学の主題を、行動の主題の背面をなす主題として考究した。

第 I 節では、『内的経験』（1943 年）の中心的な問題である、内的経験を「推論的言述」（対象を既知のものに結びつける言述）を用いて表象するための方法の問いを、詩＝文学による経験の表象との結びつきにおいて考察する端緒として、同著作のプルースト論に着目した。語の「供犠」としての一般的な詩の特質に還元できない、経験の表象不可能性を表象することによる、「作者の供犠」としての『失われた時を求めて』のポエジーの特質を析出し、そうしたポエジーと、バタイユによる経験の表象との連結を探る一歩とした。

第 II 節では、『内的経験』のエクリチュールに、バタイユ自身によるプルースト的なポエジーの実践を探る試みを行った。「序文」の記述と、著作最終部の詩の読解を手立てに、推論的言述を用いて内的経験を表象する企ての完結による、経験の最終的な表象不可能性の表象の目論見が、まさしく同著作の言語実践に見て取れることを示した。続いて、「ヘーゲル、死と供犠」（1955 年）を読解し、文学＝詩が、推論的言述のそうした無力を体現する形式であること、そして、推論的言述がまた、行動の能力であるがゆえに、行動の無力を体現する形式でもあることに光を当てた。

第 III 節では、『ニーチェについて』の新たなプルースト論に着目し、それまで内的経験と呼ばれていた経験に、超越的な神の超越性の解体と内在への崩れゆきが看取され、そのようにして、失われた内奥性への回帰という歴史的意味が付与されることを検討した。そのうえで、『エロティシズムの歴史』（1950-51 年執筆）で展開されるサド論に目を移し、キリスト教神秘家の「神的感覚（テオパティ）」から、サドの描く「無感動（アパティ）」への移行に、バタイユの無神学の営為が結びつけられ、また、文学がその営為の主要な担い手として、歴史のうちで歴史の終焉を予示する役割を定められることを論じた。

第 IV 節では、『文学と悪』（1957 年）を舞台に、文学と行動の関係に係るバタイユの思索の到達点に肉薄した。目的的な行動に寄与せず、現在時の瞬間の優位に拘るものである文学が、行動の必然性を前にしていかなる対抗的な価値をも創出せず、ただ純然たる反抗を行動に対してなすことに、その唯一誠実なあり方が割り当てられる理路を精査した。そうした反抗が帰結する、権利の不在を受け入れるなかでの自己抹消に、破局的戦争に進み行く行動に対して、行動が不在となる、歴史の終焉における人間の意識を真正に提示する最後の可能性が託されていることを明示した。